



伝統の継承と共同体の現状―
神輿が織りなす現代都市の祭礼とは



行徳文化ホールI&Iリニューアルオープン記念―

市の無形民俗文化財に指定された「行徳の神輿と祭り」を知ろう！

本行徳五ヶ町例大祭の1年を記録したドキュメンタリー映画

『神輿の町』上映会

当日はお囃子・神輿揉み実演も！

2025.10.4(土) 11:30-13:00

行徳文化ホール I&I 入場無料



主催：行徳まちづくり協議会



本行徳五ヶ町例大祭の1年を記録したドキュメンタリー

千葉県市川市行徳。この町は都心までほど近いベッドタウンで臨海部は工場や倉庫が立ち並ぶ工業地帯である一方、多くの寺社が残り「神輿の町」として知られている。五ヶ町例大祭は3年に一度開催され、人々は五穀豊穡を祝い5つの町を神輿を担いで練り歩く。

収穫祭として始まったこの祭りは、かつて農民コミュニティの合意形成のために重要な役割を果たしていた。しかし田畑がなくなり都市部となり、コミュニティが多様化した現代ではその役割も薄れてきている。

祭りは各町の自治会を中心に運営されるが、自治会に加入していない住民も増え、子どもたちの数も減り、神輿の担ぎ手不足は年々深刻化している。

それでも人々は祭りを開催し続ける。神社に仕える古老、古くからの住民、ベッドタウンを求めてきた新住民など様々な人々が共に暮らし、祭りに向けて準備を進める。すでに都市となったこの町で、神輿は共同体の形成、そして人々の信仰にどのように影響しているのだろうか。



市川市指定無形民俗文化財「行徳の神輿文化と祭礼」

行徳郷土文化懇話会 会長 峰崎 進

行徳は、小田原北条氏時代から塩づくりがはじまり、徳川氏の時代には塩田開発が盛んになりました。塩を江戸へ運搬するため、行徳～江戸間に水路が開かれ、物流と旅客で行徳は大いに賑わいました。この繁栄は「行徳千軒、寺百軒」といわれますように、民家も寺社も数多く建てられ、彫刻師や塗師などの職人が多く居住する町となりました。その後、明治～平成を通じて、全国の江戸神輿4000基の半分が行徳生まれという神輿づくりの町となりました。

また行徳は、祭の華、渡御の神輿が独特に揉まれる町として、近隣からも衆目を集めています。行徳の人々は代々祭が大好きで、三年に一度の秋の大祭を待ちに待っています。

神輿は神様の乗り物、神社のミニチュア版で、神社に祀られている御神体を神輿に遷す儀式（御霊遷し／みたまうつし）から始まり、ご神体が載られた神輿を氏子たちが担いで町を練り歩き（渡御／とぎょ）、神様が町を巡幸するのです。最後に神輿が神社に戻り（宮入り）、ご神体を神輿から神社に還し（御霊返し、御霊納め）で祭りが終わります。

祭礼は、儀式で始まり儀式で終わる神聖な神事。神輿揉みの華麗さや一日の祭りの賑わいのために、町内総出で時間をかけ慎重に準備を進めて行くのです。

神輿の町

2024年 / 日本 / 40分 / HD / カラー / ドキュメンタリー

監督・撮影・編集：上野貴弘 | 撮影：司馬宙 | 出演：本行徳一丁目自治会、神明社豊受大神宮奉賛会、行徳の町の皆さん | 英語字幕：アダム・ジメネス、上野若菜

上野貴弘

TAKAHIRO
UENO

www.takahiroueno.net

1989年愛知県生まれ。映像作家。信仰と共同体形成に関心を持ちながら主に映像作品を制作しています。名古屋工業大学建築・デザイン工学科卒業。スコットランドのエディンバラ大学大学院でドキュメンタリー映画を専攻(MFA in Film Directing)。主な作品に『CHIMERIA I』(2025)、『Letters from Prison』(2019)、『不知八幡森』(2021)など。